日本経済新聞

物語 ビルマの歴史 根本敬著

軍政と民主主義に揺れた戦後 ＜評＞京都大学准教授 三重野文晴

2014/3/23付 | 日本経済新聞 朝刊

最近人気のビルマ（ミャンマー）であるが、多くの人にとって、その社会の成り立ちについての基礎知識は圧倒的に不足している。その近現代史をバランスよく著述した本書は、読者をビルマ理解の入り口に誘ってくれる。

19世紀の終わりに英国植民地に組み入れられたビルマでは、インド植民地に準じた官僚制によって近代国家が創出された。20世紀初頭の歴史はナショナリズムの高まりと知識層の自治権拡大・独立運動に彩られ、独立運動のリーダー達の日本とのアンビバレントな関係を経て、独立までの英国との渡り合いへと展開する。独立後は常に少数民族との国家統合の問題に苦しみ、危機感を抱く軍が1960年代にクーデターで政治の前面に出る。軍による政治支配は、鎖国色の濃い「ビルマ式社会主義」体制の中で、結局この国の統治機構に長期にわたって深くビルトインされていくことになる。

軍政を導いた内戦・国家解体の危機と、軍政が生む民主主義・人権の抑圧という2つの要素が悪い循環を生み続けてきたこの国の戦後の歩みが、豊富な史実によって述べられる。多様で複雑な少数民族の問題や、「改革後」に噴出している宗教対立が、英国統治下の政策に淵源としてつながっていることなど、現在の問題に対して歴史が教えてくれることは多い。

学術的歴史家にとって、一国の通史を物語る仕事は「余技」と「集大成」の混じった難しい作業であったに違いないが、本書は双方の要素が絶妙に織り込まれた好著になっている。各所にちりばめられたトリビア的な知識はビルマ専門家の面目躍如で、読み物としての魅力を高めている。ウー・ヌーやアウンサンスーチーをはじめ時代のリーダー達を紀伝体風に登場させて、彼らの思想を常にビルマ社会・文化の文脈から理解しようとする姿勢は、熟練の地域研究者としての主張でもあるのだろう。

欲をいえば、在来の文脈に加えて、リーダー層による西欧近代思想の受容のされ方についてより詳しく知りたかった。戦後に見せてきた経済体制と対外関係の極端な振れ幅を、指導者達の経済思想からどう理解できるのか、その点でも歴史が教えてくれることは多いように思われるからである。

許諾番号30033485 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。